

筑波大学生から見た就職活動におけるインターンシップの位置づけ

菊田 文香

近年、大学生による就職活動の文脈で、インターンシップが注目されている。企業の実施率も、学生の参加率も増加傾向にあり、大半の企業や学生がインターンシップを実施する、参加するメリットや必要性を感じていると考えられる。インターンシップに関する研究はこれまでも多く行われているが、参加後の変化や効果を量的に示したものが大半で、ここからインターンシップで得た経験のどのような部分が就職活動にどのような効果をもたらしたのか、経験のどのような部分に何故満足したのかを読み取ることは困難である。そこで本研究では、インターンシップでの経験を基に、いかに個人が考え、どのように次の自分の行動に活かそうとしていたのか、インターンシップをどのように位置づけていたのか、就職活動とはどのような関係性にあるのか、個人の具体的なエピソードから明らかにすることを目的とした。

積極的にインターンシップに参加し、かつ、就職活動を経験した筑波大学学生（学群生・大学院生）計 14 名を対象として、半構造化インタビューを実施した。得られたインタビューデータを意味が通るまとまりに分け、その内容を基に 3 種類のカテゴリに分類した。カテゴリのうち、「インターンシップで実際に行った作業等に対する具体的な説明とそれに対する感想・評価」に分類された発言を抽出し、分析対象とした。

調査対象者が就職活動等に影響したと考える経験を分析することで、2 種類の「インターンシップの効果」を明らかにすることができた。一つは、インターンシップでの経験で業界や企業に関する事柄を詳細に知ることを通して、その後の方向性を決定するパターン、もう一つはインターンシップでの経験を就職活動そのものに活かしているパターンである。前者はインターンシップを経験したことで、参加前からのイメージや考えが変化したり方向転換につながったりなど、企業・業界の内定や志望に直結していた。後者は、内定や企業・業界の志望に直結していないものの、インターンシップの経験そのものを就職活動に向けた戦略的なものとして位置づけて行動していた。いずれの事例も、インターンシップでの経験を自身の今後の行動に活かそうとしている、もしくは振り返った時に結果的に生きていたという点で共通していた。さらに、インターンシップと就職活動との関係について、調査対象者の語った内容から、両者の境界線が曖昧になっているだけでなく、ほとんど一体化している様子も見られた。

最終的に、参加した企業のどこに注目し、どのような事柄を情報源として求める情報を得たか、といった点は様々であるが、インターンシップでの経験を、企業・業界の内定や志望に直結させるものとして、もしくは就職活動に向けた戦略的な使い道として位置づけ、今後の個人の行動に反映し活かそうとしていた、もしくは結果的に生きていたことが示された。

(指導教員 松林麻実子)